一八〇年代に起こるヴェルヌム・フロン・ボルトの政治思想

吉永圭一序二フムボルトの思想展開

国家忌避的態度教育制度改革論に於ける国家への接近

三一八〇年代に起こるフロンボルトの政治思想

発の形ありべきドイツの形

政治理加と陶冶

フロンボルトの政治思想と言語思想の関係

言語を通じた教養の展開

出版の自由

政治思想の中の新人文主義的理論
序

筆者は過日、ウィルヘルム・フォン・フンボルトの政治思想と教養の理念を現代正義論（特にリバタリアニズム）に資することを企図して著した一連の論文を一にまとめ、上梓した。本稿は当時、問題に気付きながら文章化に際して、一見することができたあらゆる材料をもとに、フンボルトの思想についての考察を試みたものである。そこでは、フンボルトの思想の構成要素、その特徴、その歴史的背景、その現代的意義について、詳細に考察することができる。

近代ドイツ政治思想史における優れた業績であるフンボルトの一八〇年代の政治活動を彼の新人文主義の理念から捉えることを、歴史的に考察し、その思想の発展を追究する。彼の思想は、単なる言葉のあやと、純然たる政治家でも影響を受け取ることがあり得るようなものであるから、その構成、その展開、その内容が示される。そこでは、フンボルトの思想の構成要素、その特徴、その歴史的背景、その現代的意義について、詳細に考察することができる。
ボルトはこの年代には、シュタイナーもしくは、主婦的な国民国家の理念に近づいていた、という意外な結果がある。のちに明らかになるのである。しかし、「彼はまた自分の文化理想の為に、ドイツが主婦的な權力国家に発展するることを、十分な意味では望んでいなかったということ。彼の国民政治的な理想は、一八世紀の世界主義的教養から来ている諸理念によって、ドイツ人は文化国民・人間性国民たるべき使命を持っているという観念によって、弱められた。」

本稿は右に見える、微妙なバランスを保つマイネッケのフンボルト研究を下敷きにしている。すなわち一方で現実的な政治行動の中で国家としての利益を確保する姿勢を保ち、他方で新こんにちは主義的な思想を捨てない政治家としてのマイネッケの研究に対する独自性を本稿に求めるならば、それはフンボルトの実践的政府文書の中で彼の言語思想の影響等を受けながら言語への思考を深めていた。一九世紀に入ってからは、彼の言語研究は大きな展開を見せる。そして教育改革の責任者として著した文書に言語教育（特に古代ギリシア・ラテン語）の重要性を訴える他、言語に関する論文を書く努力をし、古代ギリシア文学の翻訳を完成させ、政界引退後は言語研究をライフワークにしたフンボルトである。

優れた政治家が、政治的実践に携わる前に構築した思想・信条を場当たり的に変更することはない。彼に見られるのは已の狭さから来る日和見主義ではなく、長期の観点から来る臨機応変である。一八一〇年代のドイツの自立を当時の欧州事情の中で探ったフンボルトの政治文書の中に、彼の言語思想が活かされていると推測すること。
日本の近代史における政治活動の様相を論じる。その中で、フョードル・ドリヒ・マイネッケの思想が注目されている。マイネッケは、フランツ・フォン・ボルクホフの思想を基に、国家の権力が人民の権利を尊重するための政治思想を提唱した。彼の思想は、自由と民主主義の原理に基づき、国家の権力が人民の権利を尊重するものである。
第六章では教育に言及するが、フンボルトはこの時期、国家による教育への関与に否定的である。高の多様性における人間の育成が正に重要である。フンボルトによれば、公教育は市民あるいは臣民の育成を目的に、あるいは何の進歩もないか、人間のエネルギーの欠如に至るのである。

フンボルトの目指す人間は以下の文章に示されている。概して、教育はただ、特定の人間に与えられる市民的形態を考慮することなしに、人間を形成しなければならない。だから国家は必要なのだ。自由な人間の下では家族の絆もより密になるし、両親はより熱心に子供の世話をし、より裕福になり、子供の希望に応じることが出来るようにする。自由な人間下では、熱心に見習うといったことが生じる。そして教師の運命が国家に当時のフンボルトは身分や職業によって規定される「市民」ではない、存して良好教師が育つ。

当時、フンボルトは国家に一定の役割を認める議論を展開している。『国家はむしろ』現実
立教法学 第83号（2011）
この原因は、その硬直した政治体制と分裂状態にあるとされ、ドイツの領邦国家の為政者は何らかの対応を迫ら
れることになる。このような問題点は以下の二点で具体化していた。第一点は、領邦国家内に身分の差別があり、
人々の自発性が乏しく、外敵から自主的に祖国を守ろうとする気概が欠けていた点である。第二点は、多くの領邦
国家への分裂という点である。自らの領邦の利益のみに関心を払う自己保身の姿勢が外圧を前にした脆弱性となっ
たのである。
このような問題を克服しようとする動きがプロイセンで見られたが、その原動力となったのがシュタインであ
る。彼は単に法律を上から押し付けるだけではなく、内戦内乱を平定することを期待した。シュタインは
ドイツの領邦主義の克服という課題を実現し得るものとして、軍制改革、憲法制定、国民教育等に取り組んだ。
プロイセン改革に一〇九年から内務省宗教・公教育局長として協力することになる。ハレ大
学教員が大学のベルリン移転を請願した際、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世は物質的な力において失った
ものを精神的な力で補う必要ならないと述べたとされるが、プロイセンが担ったのは、正に国王の言う精神的な力
の補強であった。
彼はベルリン大学創設を尽力したが、わずか一年でその職を辞してしまう。アルテンシュタインとドーナの下
では、制約のないやり方で自分の理想を実現する為に努力することが不可能だとフンボルトが考えたとも言われ
ている。ところが、辞職後直ちに
プロイセン外交の重要な役割を演じ、一八〇九年未に閣僚を罷免されるま
で、主に外交の舞台でフンボルトは活躍する。
教改に関するフレデリック・リトアニア学校計画は、一八二〇年（以下学校計画）を見てみたい。一〇〇年、特定の階層のためではなく、国民全体のための学校、もしくは国家

生活もしくは個々の職業が必要とするものは、一般的な教育が終了した後で別に学ばなければならない。「公教育論において、一般的の教養を意味するだけにとどまらず、諸個人を人間として同一基盤のうえに立たせるための保障でもあった。すなわち、このような社会関係を身分制社会でのそれとは全く異なった次元で維持させるための保障でもあった」（27）。

ここに示されるのは、特定の身分や職種に寄与する特殊な機関としての教育施設ではなく、人間一般に奉仕する教育を想定する「教育の平等」であり、ルソーの掲げた教育原理への賛同である。（これらは身分毎の教育により社会階層を維持しようとした当時の国家体制への反対でもある。）

「マンガーや、いつもの円満な気質から離れた激しさもあって、彼のメンバーに市民ではなく人間という存在を重視する」フランス革命のような破壊的活動による社会変革は許容されるべき。
方法のはないが、教育による変化、あるいは教育自体の変化によって個人の成長を阻害する因習を取り除くことは望ましいものであった。

公教育の下で、特に大学内での陶冶をフンボルトは考えたのであるが、それは詳細にはどのようなものだったか。

ベルリン高等学術施設の内なるびに外的組織については（八〇年）では、次のように述べられている。

高等学術施設においては、大学をまた完全には発展されていないもの、まだいつまでも完全に見い出すことのできないもので、学問を学ぶ者ではなく、むしろ自分でも研究し、教授は学生の研究を指導し援助する。なぜなら大学教育は学問の統一を理解し、学問の統一を産み出すことができるようにし、それで創造力を利用するからである（30）。

ここにおいて大学は、単に教師が学生に己が知識を伝授する場所とされるべきである。知識の保存というよりむしろ、学問の、あるいは問の再産が大学の本旨と言えよう。それに関連するのが、「自由と孤立」であり、大学内での「親密な共同体」などである。「学校計画」では次のように述べられている。大学の本来の使命は、人間が自分自身で、自由で、自己を独立に、そして大学の外的な機関はこのような両者に由来する。自由の意味におけるこのような自己活動には、自由が必要で、孤高が役立つ、そして自己を外的な機関はこのような両者に由来する。自由と孤立はこの領域で支配的な原理である（30）と考える。ここで「自由と
孤独とは、教師と学生が文筆家のように孤独に研究しながら、成果を自由に交換し合うように協同することを意味しているのである。ここにおいては、教師はもはや教える人ではなく、学生も教える人ではない。講義の聴講というものは付随的なものに留まり、重要なのは教養を持った人々（教師・学生）から構成される「親密な共同体」なのだ。

このような組織の中で生まれているのは、ヘルムート・シェルスキーによれば「個人的な教養的交際の形態」である。そしてそこに参加出来るのは少数のエリートだろう。

しかし、エリートはただ大学を学問問題の再生産の場としてのみ考えていたなら、それは我々の今までの考察の本質は、内面には客観的な学問を主観的な陶冶と結び付け、外的・個人の終了した学校教育を自らの指揮下で始める研究と結び付けることである。ベルリン高等学術施設における高発発的解決、そのような施設の啓蒙絶対主義的国家人間非個人化・機械化し、人間存在を破壊する問題性を払っていたのか、フェルディナントが国家行政の責任者として大学という一つの空間を構築する際、この危険を回避する為に提案したのが、「大学を陶冶の為の場」とする見解であった。シェルスキーはこれを、新人文主義とドイツ観念論の融合の所産と言え、人生ならびに世界の全体的関連を新しい意識および新しい省察の方式で周到に考察した思弁的観念論哲学は、これまでに見られない斬新な知識形態あるいは学問形態として、つまり普遍的な真理にについての生産的な独創的思惟として、確たる地位を占めるようになっていた。真理の追求は、いままでの認識および直接に実際的な目的に役立つ知識というものの付随的なものに留まり、重要なのは教養を持った人々（教師・学生）から構成される「親密な共同体」なのだ。
れ、それで学者の本質についての新しい見解から人間の新たな使命が生じた。

フンボルトの大学理念は「学問による教養」理念を中核としていたものであるとわかったが、ここで注意すべきは、文化国家形成に寄与する人材の内面的な教養及びその基礎としての哲学の重要性を説いている、文獻学だろう。関正夫によれば「純粋な理念をもつ学問に、学生が対決的に取り組むことにより、学生自身が哲学的学問を通じて、学生の内面に形成される純粋理性等の認識である。」

このような理念の下に、「研究と教育の統合」が主張されるのである。この統合はあくまで哲学におけるのみ通用する見解であり、他の学問（法学、医学……）にまで妥当とするのはフンボルト自身想定してなかったことに注意。

さて以上の如く、フンボルトは「八〇九年二月・国王宛の報告書に次のようになされる。」（公教育を司る当局においては諸報告書の導入部で展開されている理念に基づいて、強調されているように今日まで多分に実際的に当局はその諸原則に従って参りました。当局は、全ての身分に等しく必要な、そして各職業に要求される能力と知識が容易にそ

ねばなりません。すなわち、教育方法においてあれば学ぶことを気軽にかけるのでなく、むしろ学ぶ中で記憶力

1810年代におけるヴィルヘルム・フォン・フンボルトの政治思想（吉永 圭）
このようなフンボルトの教育論においてデヴィッド・ソーキンは、新人文主義と啓蒙主義の相違を見ることに、啓蒙主義、特に統治者側からの啓蒙的理念において陶冶概念は国家に有益なものであった。しかしフンボルトは陶冶を単なる道具的考えとして実現されるべきである。ソーキンによれば、フンボルトは自由な個人になるように教育された市民であるというが、啓蒙の概念は間接的に、陶冶の概念をもとにした。その状態を作り出し、国家に奉仕することが教育の究極の目的である。しかしながらフンボルトは自由な個人になるように教育された市民であるというが、啓蒙の概念は間接的に、陶冶の概念をもとにした。その状態を作り出し、国家に奉仕することが教育の究極の目的である。
D. Sorkin, ibid., p. 65.


E. Spranger, Wilhelm von Humboldts Beiträge zur Reform des Bildungswesens, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 2, pp. 135-136.
1810年代におけるヴィルヘルム・フォン・フュルケトの政治思想（吉永）
整備や地方自治体の改革構想等が論じられていた。ここでは、後に行う万ボルトの議論に関係すると思われる、都市の自治を認めようとする「都市条例」について言及したい。

一八〇八年の都市条令は、シュタインの自治思想をよく表したものと言われる。都市は独自の裁判権や警察権等、中世的特権を国家に移譲する一方、国家の過剩な後見から解放され、市民の自治団体として再編成された。その中心機関は市民の選挙による市議会で、これが行政機関である市参事会を選出する。議会主義体制が都市に導入されたが、その前文には、公共団体への市民の参加により市民の公共精神を呼び起こし、維持する必要を謳っている。ここに市民の自由かつ献身的な協力を通じて、国家が従順な市民から主体的な市民への転換を意図するシュタインの思想が示されている。

もっとも、ここで言われている「市民」の内実が重要である。都市の住民は、市民と市民権を与えられていない。都市内に家屋を持って定住し、地元の行政が市内に居住者を保護する「都市条例」及び免除特権享有者にのみ区別されている。市民権を有する者は特別に選ばれていない。都市の問題に責任を負う、都市の職人、公職に任命される場合はそれと引き受けた義務を負う。都市の住民は、自らの財産に応じて都市の問題に貢献し、都市の職人、公職に任命される際には異なる、都市の伝統である団体的性格の維持が意図されている。

都市条令は都市の行政組織に関する限り相当広範な市民の政治参加を認め、都市に対する絶対主義的後見を排除する機能を果たすべきものだった。だが他方で都市条令は、国家・都市間の行政事務の配分に際して国家的干渉の

86
余地を残したと考えられる。村上淳一はこの点に関して、当該欠席が完全な自治の実現に致命的だったことは、シュテインの改革の内特に自治に関する改革構想のほとんど全てが挫折したのに対して都市条令のみが施行されたことから逆説的に証明されると述べている。

シュテインの改革後、改革の中心に登場したのがハルデンベルクである。シュテインとフンボルトの関係が友好的だったのに対して、ハルデンベルクとフンボルトの関係は危ういものであった。しかし反面、フンボルトの政治的な志向を持つことを期待されているハルデンベルクの構想する国民代表制は、即位、が政策の基盤に立て直し作業を参加を企図していたのだが地方レベルでも、あるいは全国レベルでも大きな成果を残すことが出来なかった。もっとも、フンボルトの立つ直し作業を、強固な地方的基盤を有する貴族の協力なしに進めることは出来なかった。ハルデンベルクの改革はフンボルトの自由主義的な経済社会を創出することには成功したが、身分制を実質的に脱することが出来なかった。

1810年代におけるヴィルヘルム・フォン・フンボルトの政治思想（吉永 圭）

連邦（一八五年）である。解放戦争で勝利を収めたドイツの国民の悲願、すなわちドイツ統一国家の成立は先送り
この選択が当時の政治情勢では最も現実的であっただろう。当時のドイツ諸邦の君主達が自らの主権を手放すことは想定出来なかった。政治的指導者達も、この段階での統一は難しいと考えていた。ヨーハネス・ハラーはこの時代、政治の本質を見誤っている。どんな時代でも、政治の手腕によって究極の望みが叶えられることを要する者は、政治的手腕によって統一が難しいと考えていた。政治家は手品師ではなく、彼が出来ることと言ったら、与えられた素材を用い、その政治的素材の本性に従って、何かを作り出すくらいのことである。翻って、一八一五年の段階で、あくまで以上のことが実現できるということを要する者はいない。考えを変えることも出来なかった。

2 フンボルトの政治思想

先に言及したマインツの議論からは、政治実践期においてフンボルトは自己の新人文主義の思想に依拠することを自覚していたように見える。しかし同時に、フンボルトは教育改革のみならず他の政治改革においても、新人文主義の思想を現実政治へと変換し、実用化させたという評価があることも考えなければならない。

若き日のフンボルトは一国の憲法を問題にしていなかった。すなわち、永続的な憲法はどのようなものであるべきか、あたたれは市民が自由に展開し安心して自らの才能を伸ばすことが出来るような国家活動の限界をどこに引くべきか、あくまでもこの選択が当時の政治情勢では最も現実的であっただろう。当時のドイツ諸邦の君主達が自らの主権を手放すことは想定出来なかった。政治的指導者達も、この段階での統一は難しいと考えていた。ヨーハネス・ハラーはこの時代、政治の本質を見誤っている。どんな時代でも、政治の手腕によって統一が難しいと考えていた。政治家は手品師ではなく、彼が出来ることと言ったら、与えられた素材を用い、その政治的素材の本性に従って、何かを作り出すくらいのことである。翻って、一八一五年の段階で、あくまで以上のことが実現できるということを要する者はいない。考えを変えることも出来なかった。

2 フンボルトの政治思想

先に言及したマインツの議論からは、政治実践期においてフンボルトは自己の新人文主義の思想に依拠することを自覚していたように見える。しかし同時に、フンボルトは教育改革のみならず他の政治改革においても、新人文主義の思想を現実政治へと変換し、実用化させたという評価があることも考えなければならない。

若き日のフンボルトは一国の憲法を問題にしていなかった。すなわち、永続的な憲法はどのようなものであるべきか、あたたれは市民が自由に展開し安心して自らの才能を伸ばすことが出来るような国家活動の限界をどこに引くべきか、あくまでもこの選択が当時の政治情勢では最も現実的であっただろう。当時のドイツ諸邦の君主達が自らの主権を手放すことは想定出来なかった。政治的指導者達も、この段階での統一は難しいと考えていた。ヨーハネス・ハラーはこの時代、政治の本質を見誤っている。どんな時代でも、政治の手腕によって統一が難しいと考えていた。政治家は手品師ではなく、彼が出来ることと言ったら、与えられた素材を用い、その政治的素材の本性に従って、何かを作り出すくらいのことである。翻って、一八一五年の段階で、あくまで以上のことが実現できるということを要する者はいない。考えを変えることも出来なかった。
きか。そこでフンボルトが自らの考察から導き出した視点とは、
国家の中で個人と個人の教養にとって最も好ましい状況とは、
国際社会における国家の好ましい状況を生じていない。この時期のフンボルトは、
国内における個人の状況を決するものであるにも拘わらず、国際社会における国家の好ましい状況を
求める。しかし国難の中、政治的使命を背負う立場になったフンボルトの視野は広がる。
彼の欧州における新たな政治秩序の基礎にあるのは独立国家間にある国際法的関係の原理であり、
これは均衡の原理である。すなわち如何に欧州の均衡を回復するか、そして均衡の原理によって完全なものとな
る。ナポレオンにより欧州の均衡はひどく乱されてしまったのでこれを回復せねばならない。ここにフンボルトの
関心は次の問いに先ず向けられる。二大強国間の国際関係は、如何に均衡を回復するか、そして均衡の原理によって完全なものとな
る。このように欧州国際問題を背景にして、フンボルトの政治思想は極めて多岐に亘るが、以下では彼の憲法、
法令の存在は内在的重力を通じ均衡の維持にかかっている。

【1833〜1834年ニュートン・デイヴィ］この元気が韓国に対する愛国心であると解せられる。
フンボルトの思想は、国内の全ての
善が流れ出る源泉である精神を自己の内に保持することができるのです。……対外的に強い国民だけが、
国内の全ての
統一国家に於いてのドイツへのフンボルトの希望である。
自由。

共に勝ち取った名誉と乗り越えた危険の記憶や、密な結び付き（それは父祖が結び付けたものであり、ただ子孫の憧れの中でのみ存在するもの）の追憶に依拠しているのです。

「自然が個人を国民へとまとめる。人類を国民分けるやり方には、それだけでは取るに足らぬ個人と、個人においてのみ意味を持つ種族、均衡を取りながら、緩やかに、力強く発展していく真の過程の中で維持するよう、極めて深淵で神秘的な方法が存在します。政治はそのような見解に立ち入るとは限りませんが、政治は事物本来の性質に反してまで活動することは許されません。しかしこれもドイツは、時局によって常に拡大縮小する境界線の中で、住民の感情の中で、そして他の国の認識の前で、一つの国民、一つの民族、一つの国家となるでしょう。」

しかし当時の外交事情から、ドイツ統一が望み得るだろうか。フンボルトは続けたこのように問うのだ。「どうして再びドイツをまとめていくべきか？」

同様の見解は、翌年フリードリヒ・フォン・ゲンツに宛てた文書にも見られる。「我々の時代には、ドイツの形態の基礎となる得る如何なる形式も存在しません。……諸国相互を結合するあらゆる政治的立教学説が現代に固有のものであり、それには、現実創設すべき国家連合（Greaterverse）を天の形式に拠く実質的憲法の可能性を否定し、連邦的な結び付きに活路を見出している。'
1810年代におけるヴィルヘルム・フォン・フンボルトの政治思想（吉永 圭）

「フランス憲法論」（1791年）においてフンボルトは、あるべき憲法について次のように論じている。「人が如何に綿密に現在の状態を研究しようと、現在の状態の次に続くものを如何に綿密に計算しようと、いつでもそれで十分というわけにはいかない。全ての我々の知識や認識は、それ故あるべき憲法に関しては我々はわずかしか把握することが出来ない。そしてここでは全てが個性的な諸力、個性的な活動、苦悩及び享楽にかかれるとなる。」

「フランスは未だ新しい憲法を受けて入る準備が出来ていない。理性の単なる諸原理に従って制度的に構想された国家憲法の準備を、国民はまだ十分に整えることは出来ない。彼は現在の方向を究明し、次にこの方向を発見するのを直ちに、これを促進するかあるいはこれに抵抗する。すなわちこの方向は別の修正を受け、この修正は更にまた別の修正を受けるという過程が続いていく。だから彼はそれを完全性の目標に近づけることで満足するのである。」

フンボルトによれば、フランスは未だ新しい憲法を受けて入る準備が出来ていない。理性の単なる諸原理に従って制度的に構想された国家憲法の準備を、国民はまだ十分に整えることは出来ない。彼は現在の方向を究明し、次にこの方向を発見するのを直ちに、これを促進するかあるいはこれに抵抗する。すなわちこの方向は別の修正を受け、この修正は更にまた別の修正を受けるという過程が続いていく。だから彼はそれを完全性の目標に近づけることで満足するのである。
フンボルトはロシアとオーストリアでドイツを二分する考え方、有害な敵意を生む結果になるという恐れから拒否した。先に述べたようにフンボルトの結論は合衆国であるが、フンボルトの二国間の一致と友好が、全構造の要石である。そしてこれを支えるものとして、ロシアとイギリスの保証を想定している。

フンボルトによれば、外敵からの防衛はドイツを四あるいは五つの大国に分ける場合に可能かもしない。しかしドイツは欧州において明らかに三重的地位を占めている。フンボルトは非常に重要であるが、優れた影響力というものは言語・文学・習俗・思考法を通じて生ずるのである。フンボルトはこのようなら、いわば文化的な力の犠牲にすることなく、政治権力は結び付けたいと考えている。ドイツの文化的影響力は今や、教養の多様性に負っていることを意識しているに過ぎないのです。そして「個人と同じように、国民は政治によっても変えられない方向性を持っている。」マイネッケはこの観点に注目し、「ドイツの細分化を、その精神的教養の多様性の為の前提であるとして称賛しており、それ故彼は、ドイツの細分化が完全に止むことを、望まなかったのである」と述べている。

フンボルトはドイツ連邦成立後も、積極的に統一ドイツを構想していたないように思える。彼の領邦主義的見解を見出す。『分別を失ったり、感謝
される』はカルスパートの決議に反対する八一九年の次のような文章の中に、彼の領邦主義的見解を見出す。『分別を失ったり、感謝
される』はカルスパートの決議に反対する八一九年の次のような文章の中に、彼の領邦主義的見解を見出す。
性を縮小することが問題となっているのです。国家連邦というよりはるかに連邦国家の概念に立脚したこの原理が、ここに表明されているような形で現実に効力を持つことになれば、……国王陛下の領内における立法全体が連邦議会の決定に左右されかねません。この文書自体はハルデンベルクとの緊張関係に置かれたフンボルトの政治的信条を反映したものか疑わしい部分もある。しかしその自ら、人間が人間で、とくに政治を自由にとらえるものである。
この移動の自由に続いてフンボルトは、他の領邦にある大学で研究する自由についても述べている。『全ドイツ教育改革の成績』の一部である。
次に、一八一九年にシュタイナーに対して著されたプロイセン憲法に関する文書『プロイセン憲法観』を検討しよう。

憲法を設ける主な目的の内、主体的（な目的としては）、市民が立法・監視・行政に参加することを通じて市民感覚と市民としての手腕をより獲得し、そのことを通じて自らが対目的により倫理的になり、自らの職業と個人的生生活を同胞の福祉により一層密接に結び付けることにより、それらにより高次の価値を与えることを挙げている。

また次のように言う、「国家における生活には、全体における活動と参加の三種類（あるいは望むなら、段階）がある。制度化された秩序へ受動的に適応すること。これは住民・被保護民・外国人全てがしなければならない。国家社会の積極的なメンバーハとして、一般的職業から（aus dem allgemeinen Berufe）秩序の創設と維持に参加すること（88）」と、これは国家公民の本来的な仕事である。公僕として、特殊な職業から（aus besonderem Berufe）秩序の創設と維持に参加すること（88）。

二番目のあり方に見られるような国民の政治参加の促進は、シュタイナーの政治思想の継承であると言って良いだろう。すなわちシュタイナーは都市の自治の改革を企図するのだが、そこで目指されていたのは「公共精神と市民意識の振興、眠り込み、もしくは誤って導かれている民力、また散在している知識の活用。国民の精神、その意見や欲求と、国家官庁のそれとの調和。祖国、自主独立にた国の個的な誇りに対する感情の蘇生」（ナッサウ観書）であ
しかし長い間、特にプロイセンにおいて、政治の世界からこの人々は疎外されていた。野心、虚栄心、怠惰、性格の衝動等が思想の根源であり、統治の手法に対する極めて破滅的な無関心がそれらによって生じていた。しかしフランソワ革命のように、国民の感情が一気に政治活動に結び付くことにても警戒しなければならない。

フンボルトは次のように主張する。「関心を段階的に入、国家内に存在する個々の小さな市民の共同社会に結び付けて、当該社会の為に関心を呼び覚ます。既に一般的に存在している。

市民と議会を結び付ける際にも、フランソワを否定的に引用しながら、段階的な過程を経ることを想定している。

行政から媒介項を通じて全体に関する審議へと高まっていくことにより行われる。自体でさえ権限のない革新の要素となり得、それ故そうなることを防ぐために最も注意せねばならない。このことは以下に示すように、議会の活動領域を厳密に制限することによって、またフランクト обыч加大であり、無関心の大きな関与からフンボルトは、市民の社会的態度及び倫理的陶冶に良い作用があることを期待していたと思われる。

〈プロイセン憲法覚書〉は確かに、受動的な臣民から能動的な市民の創造という理念から地続きのものであるはずである。しかし同文書からは従来の用語や制度を採用している部分も多い（貴族を批判的に考察しながら、その役割にも注目している）。何もかもを一気に
1800年代におけるウィルヘルム・フォン・フンボルトの政治思想（吉永圭）
都市条例の改正に際し、一九一三年の文書において、フンボルトは職業という範囲を用いることに懐疑的であることを明らかにしてい

立教法学 第 83 号（2011）
四 フンボルトの政治思想と言語思想の関係

フンボルトはその生涯のほとんどの時期に、何等かの言語思想に関する論文を残している。当初の予定通りに完全に学問的な型に従っているわけではないが、彼の言語思想はそれだけで完結しているものではない、彼の他の思想の背景になっていると考えることの可能である。イザベラ・フェロンによれば、「フンボルトの政治思想とその時期的、理念的連携が認められた範囲の言語思想に関する論文を参照し、前節で提示した問題を明らかにする議論を展開する。」

1 フンボルトの言語思想

フンボルトが言語に興味を持ったのは早い時期だった。彼は少年時代にギリシア語、ラテン語、フランス語、イタリア語を学び、学生時代には古典語を集中的に修め、裁判官時代にはヘブライ語を学ぶという。語学の天才であった。イェナ滞在期（1794年～1797年）に既に言語に関する記述を始めている。彼のラフワワークとなる言語学の真の契機と見て良い。スペイン旅行中フンボルトはパラジェ語に触れ、一般的な人類学的主题設定へと向かっていくのである。その後フンボルトは政治の表現台で重要な働きをすることがある。政治的活動と並行して言語学や古典研究は続けられ、政界引退後一八二〇年から言語学に関

100
さて、フンボルトが言語を有機体として捉えていたということは有名である。有機体論は、フンボルトの時代において、歴史主義と並んで展開し、現代の言語研究に大きな影響を遺した精神運動であった。有機体論は個別の部分に連携している「有機体」という用語自体は、生物学的な過程に由来している。

しかし、フンボルトが言語について述べた初期の「思考と言語について」（一九〇）において、言語を記号として捉えている側面が強く、有機体論的議論はまだ定着していない。フンボルトは思考の本質は反省することにあると述べ、如何なる思考も人間の感覚の一般的形式の助けなしには生じ得ないとする。当該形式において初めて人間は思考を把握することが可能になる。

「言語を求める人間」は語号（語号研究の序論）においてフンボルトは「言語は自己活動的であり、人間をよく導き、同時に人間を通じて発生するものだ」と述べている。

「比較言語研究」では、先ず、「言語は有機体である」という思想が示される。どんな言語にても動かず難い構造を有しており、その構想は一八〇年代に練られているはずであり、本稿で取り上げることは不当ではないと思われる。

比較言語研究については（以下、比較言語研究）重要なのは一八二〇年の「言語展開の異った時期に関連した比較言語研究について」（以下、比較言語研究）である。これは一八〇六年の講演であり、本稿の展開時期から外れるように見えるが、その構想は一八〇年代に練られているはずであり、本稿で取り上げることとは不当ではないと思われる。

言語は一挙に成立させざるを得ない。
1810年代におけるヴィルヘルム・フォン・フンボルトの政治思想（吉永 圭）

所持している知識を論じた研究は、語

語は語

語として存在しているから

や、語

言語は語

語として存在していく

者

が

い

を

在

する高貴な作品なのであるから、それを任意に細分化したり、観察したもの断片的に記述することとは出来ない。

という語を用いないが、「全言語研究の序論」において既に、人間は常に言語によって、その間に捕えられており、その外部に如何なる自由な立脚点をも得ることが出来ない。あるいは「言語というものは決して專ら文学のみを通じてではなく、またそれを自体として明らかになっている民族の性格や言語自身から明らかになった歴史的知識を通じてのみ興味を起こさせるものではなくむしろ、その内部構造や基本的構成要素の本性を通じて精神や感情やその諸々を引き付け、繋ぎ止めるものなのだ」と述べられている。なお、言語の活動性から、世界観も言語発想が固まり、世界観の思想が形成されたと言えよう。このように、「言語に関する論考が連続したものとして著されていないので断定は難しいが、記号論的発想からの脱却が見られる」という言語研究の序論最終の段階のフンボルトから、「比較言語研究」の間に、言語における有機体論の発想が固まり、世界観の思想が形成されたと言えよう。このように、「言語に関する論考が連続したものとして著されていないので断定は難しいが、記号論的発想からの脱却が見られる」という言語研究の序論最終の段階のフンボルトから、「比較言語研究」の間に、言語における有機体論の発想が固まり、世界観の思想が形成されたと言えよう。
1810年代におけるヴィルヘルム・フォン・フンボルトの政治思想
（吉永 圭）

フンボルトの言語思想においては、言語は民族的精神的個性を持つと言われている。言語学習を通じて自らの民族の精神を他の民族の精神で置き換えることは、他の民族が如何に優れた文化を持っていたとしても、各民族の個性を軽視することである。フンボルトの言語思想は、言語が多様な存在物であること、及びその利用、発展、変更に伴う社会の変化を表現することを前提としている。言語は、一つの社会または文化を構成する一つの要素であり、文化的な連続性を保持し続けるために欠かせない存在である。

3 出版の自由
出版の自由の問題は当時多かれ少なかれ謙しく、いくつかの憲法構想の中で扱われていた。一八一五のドイツ連邦規約の18条dに言及があるが、ただ将来に対する約束でしかなかった。ハルデンベルクはウィーン滞在中は、少なくともプロイセンでこの分野の事態を開広げるために手を打つことを企てていた。ハルデンベルクはパリ滞在中にフンボルトと検閲の弾圧について討議し、このことにつき法務大臣キルヒアイセンに対しても意見を述べた。

フンボルトは自らの意見をまとめて、ハルデンベルクに提出した。それがあい出版の自由について（一八一六年）である。彼はこの分野に関しては未だではなから、若き日の構想において既に基本原則が固められていた（彼の構想は）政界引退後も保持された。
『カルスバートの決議（一八九九年）』において、連邦規約の約束を裏切る出版法が採択された。同法において、カールスバートの決議の約二十年前に執筆された『プロイセン憲法覚書』にも、出版の自由に関する記述がある。

以下では、プロイセンのこの二つの文書で述べられている出版の自由に関する見解を検討しよう。

プロイセン憲法覚書において、プロイセンの自由を保障することを訴えている。人民が憲法を通じて手に入れる保障は二つのものであり、憲法（プロイセン憲法覚書）の一部として、直接表明されるものである。後者は以下のものを含まねばならない。

1. 法律により絶対的保障が与えられる個人的・人格的保障。
2. 所有権の保障。
3. 良心の自由。

4. 出版の自由。

プロイセン憲法覚書においては、出版の自由を保障することを訴えている。人民が憲法を通じて手に入れる保障は二つのものであり、憲法（プロイセン憲法覚書）の一部として、直接表明されるものである。後者は以下のものを含まねばならない。

1. 法律により絶対的保障が与えられる個人的・人格的保障。
2. 所有権の保障。
3. 良心の自由。

4. 出版の自由。

プロイセン憲法覚書においては、出版の自由を保障することを訴えている。人民が憲法を通じて手に入れる保障は二つのものであり、憲法（プロイセン憲法覚書）の一部として、直接表明されるものである。後者は以下のものを含まねばならない。

1. 法律により絶対的保障が与えられる個人的・人格的保障。
2. 所有権の保障。
3. 良心の自由。

4. 出版の自由。
1810年代におけるウィルヘルム・フォン・フンボルトの政治思想（吉永 圭）

対して政府は、あらゆる面において原理、体系的な規律、確固たる制度で周囲を固めるのが良いとしている。恣意が排除された所に初めて政府は安全に活動することが出来るのである。検閲の恣意的なる活動への疑いを解消するためには、フンボルトは裁判所の活用を考えている。特にフンボルトは、表現を世に送り出す主体に言及する。責任を課すと著作者はより慎重に、真摯になるし、同時にも不都合な悪ふざけを阻止することが出来る。政府は裁判というシステムによって、検閲官の言いなりに法的な自由をすすんと促進する政府というものは積極的に強制を除去しようとします。我々の時代には確かに、新聞やそれに類似した雑誌などがしばしば公共精神を狂わせています。しかもこの重要な手段にもなるのです。第3章で如何なる規定もないままに裁判所に、出版の自由の濫用の事案を持ち込むわけにはいかない。「公正で合意されない重要な手段にもなるのです。」法律は通常、国家や市民の諸権利を侵害し得るようなやや方で出された印刷物だけを規制するものである。しかしこの事案において著作者が、公衆（公に一般人）にのみ対証を行う。更に法律は、個人を害することや公の秩序を乱す企てについて妥当するよう無視された場合にのみ対証を行う。更に法律は、私を害することや公の秩序を乱す企てについて妥当するような法律は、ごく限られた場合（先の諸権利が無視された場合）にのみ対証を行う。更に法律は、私を害することや公の秩序を乱す企てについて妥当するような無視された場合にのみ対証を行う。
たとえば著作者が、間違っていると発見していながら事実を捻じ曲げたり、事実を探知する方法を思い立ち、自分で究明することが不可能である。変法行為を促進するものなのか、は想定する。編集者を責任から解放するか否かの判断は可能だと言う。

出版物は国家福祉の為にその他の違法行為を促進するものなのか、は想定する。編集者を責任から解放するか否かの判断は可能だと言う。

作業グループその自体の威厳の保持の為に制約を加えることにに関して不斷の警戒をしなければならない。かつ、著作者が公衆に向かっているような特別な関係、という記述は、我々にカントの「啓蒙とは何か」（1784年）の議論を思い出させる。カントは啓蒙を実現する為に、自己の理性の公的な使用は常に自由である。
1810年代におけるウィルヘルム・フォン・フンボルトの政治思想（吉永 圭）
ハノール・フンポルトが論じた市民の陶冶は、国民国家志向である。それはフロイデン・メンシェン政治の責任ある立場であった当時のフンポルトが打ち出す必要があった方向性であった。しかしこれの教養的施設を形成することを止めるならば、諸学問と国民教育は必ず失われるだろう。ハノール・フンポルトの啓蒙とは何か、出版の自由について、国民国家的契機と世界市民的契機の結び付きを暗示する。カントの思想が交錯する当該論考は、ただ教育的文書であるのだろうか。フンポルトの世界市民主義的側面を含んでいる思想が醸成されることが期待されているだろう。

このことは、青年期フンポルトの新人文主義思想からの転換（変節）問題においても重要な意味を持つ。確かにフンポルトの思想が交錯する当該論考は、ただ教育的文書であるのだろうか。フンポルトの世界市民主義的側面を含んでいる思想が醸成されることが期待されているだろう。

国家的規範の強かった「新聞」に比すれば、教育機関の割引を肯定的に描き出し、政治参加による国民形成を語るフンポルトは「人間の自由」の範囲を狭めているように見える。しかし国難に際して、現実に責任を負う立場に立たれているので、自由と秩序を同時に成り立たせる、あるいは調和させる方向を模索したと評価すべきだろう。

フンポルトの秩序に対する見解は、恐らく「フランス憲法論」や「論文集」から一贯している。それは、下からの自生的・有機的秩序形成の思想である。勿論「論文集」における公教育批判論と教育施設の改革論の不一致は認めねばならないし、国民の政治参加という機会を青年期の思想に見出すことは難しい。しかし、秩序に関する新人文主義的見解は、彼の政治家としての思想に根を下ろしていた。上から押し付けられるのではなく、個性に適合するよう
1810年代におけるヴィルヘルム・フォン・フンボルトの政治思想（吉永 圭）

に形成されていく秩序は自由を阻害するどころか、自由を補強する。スピッツは次のように評している。「国家理念の展開に際してフンボルトは、一七九二年に既に著しているような『自発的な本性を持つ個性に対する畏敬の念』、そこから生じる自由への配慮に満ちていた。フンボルトはドイツ国民の政治的後進性に気付いていたし、それを問題視していた。フンボルトの一八〇八年代の政治的文書における市民の陶冶論は、彼が憧れた古代ギリシアにおけるバイデイア（イディア）の思想に近付いていたのでないだろうか。すなわち、バイデイアとは幼年期の教育を超え、人間としての善、人間としての自由の德（イディア）の完成を目的、成人教育・生涯教育を指す。これはひたすら内省的な人間を育てることを念頭に置いているので、フンボルトの生きた時期のドイツとは政治制度を含む日本の陶冶とバイデイアにはある程度の親和性があると評して良いと思われる。」

一八九九年の末、フンボルトはハルデンベルクとの確執の末、罷免される。彼の政治に向けた構想は現実の前に自体が違うが、それでもフンボルトが一八〇〇年代に指摘した国民の陶冶とバイデイアにはある程度の親和性があると評して良いと思われる。
と思われる。

D. Spitta, Menschenbildung und Staat, S. 87.

139

広川洋一「ギリシア人の教育」岩波新書・一九九〇年、二二三一三頁を参照。

140

西村貞二「フンボルト」清水書院・一九九〇年、一三〇頁を参照。

141

立教法学 第83号 (2011)